

# 難波西鶴と 海の道

森田 雅也

前回まで西回り航路から外れた福井敦賀の話でした。敦賀は西鶴のころから徐々に衰微しますが、同様に戦国期、近世初期に栄えながら、西回り航路に商業ルートを奪われた港として、小浜がありました。

『西鶴諸国ばなし』  
「貞享2(1685)年刊」巻二の三「水筋のぬけ道」に若狭小浜の話が載っています。小浜に漁師の使う網

糸の商売でもつけて、

裕福に世間を渡る越後屋という店がありました。この店にひさという下女が年季奉公していましたが、京屋の庄吉という行商人と恋仲になり、将来を誓い合う仲にまでなりました。

ところが、越後屋の女房がこれを見とがめ、使用人ひさをせっかんしますが、エスカレートして、ひさの顔に焼け火ばしを当て、二目と見られないむい姿にしてしま

## 小浜越後屋の下女ひさの逸話

【35】

ます。ショックを受け、たひさは若狭の海に投身自殺して、行方不明になってしまいました。

そのころ、奈良秋篠の里では、里人総がかりで農業用水のための池を掘っていました。なかなか水筋に行き当たりませんでした。ついに掘り当て、里が大洪水になるほど、水が湧き出します。

その溢れた水が引いた後、若い女の死体が残されていました。この里の女ではなく、皆が不審に思っている。偶然訪れた旅人が、この死体は越後屋のひさに違いないと言います。調べたところ、着物や所持品から、本人に間違いないというところになりました。

連絡を受けた京屋の庄吉は、とてもつらく、出家姿となって、秋篠の里を訪れます。

その篋陰で仮寝をしていると、庄吉の夢枕に、火災に包まれた車に乗った2人の女が現れます。1人はひさ、もう1人は越後屋の女房でしたが、ひさは女房に焼き金を押し当てて、「今ぞおもひを晴らしけるぞ」と言っています。

その夢を見た時と同じ日、若狭にて、越後屋の女房は絶叫とともに果てたということです。この話には、若狭から奈良への「水筋」の存在が利用されています。奈良東大寺二月堂では毎年お水取りの行

事がありますが、その水をくむ井戸が「若狭井」です。この地下水脈の水源が、小浜市龍前にある若狭彦神社の「鶴の瀬」と言われますが、当時も周知の事実だったのでしょうか。

もちろんこの伝説より、ひさの越後屋の女房への復讐の方が中心ですが、壮烈な恐ろしい話と言えますね。

ところで、こんな事件を起こした越後屋は、その後も無事で栄えたのでしょうか。きっと、敦賀の利助と同じ末路をたどったのではないのでしょうか。そこには敦賀と小浜への何かの暗示があるのかも知れませんね。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

# 若狭——奈良の水筋の存在利用